

子どもの 事故防止

小児科部長

齋藤 恭子【さいとう・きょうこ】

島根大学医学部：平成9年卒業

<専門医・資格>

・日本小児科学会小児科専門医

はじめに

昨年、当院救急外来を受診した小児(15歳以下)は約1900人、うち4分の1が外因系疾患(外傷、異物誤飲など)による受診でした。外傷といっても、処置のいらない打撲傷等の軽症が多いのですが、そのヒヤリ・ハットの中には重大事故になっていても不思議ではないケースもあります。

こどもを事故から守るためには、どうすればよいのでしょうか。厳重監視を強化するしかないのでしょうか。一時も子どもから目を離さないなどという事は無理ですよ。

では、どうすればよいのか。

こどもの事故は発達段階によって起こりやすいものがあります。その発達に合わせて適切な備えを行うことが重大事故の予防に最も有効と言われます。

以下に、各月齢、年齢での発達と起こりやすい事故についてまとめてみました。

子供の発達と起こりやすい事故

①誕生～3か月

この時期の赤ちゃんは、寝返りはしません。しかし、じっと寝ているわけでもありません。頭に比べておしりが軽く、反った勢いで本人の意思とは関係なくひっくり返ってしまうこともあります。2か月を過ぎると、手足をバタバタ動かしてずって移動していたりします。

この時期に起こりやすい事故とその予防策を表1に示します。

事故例	内 容	対 策
転落	親が誤って子供を落とす。ベビーベッドやソファからの転落。	抱っこ仕方を見直し、高さのある場所に寝かせるときは手を離れない。離れるときは手を添える。
切傷・打撲	ベビーベッドに頭をぶつける。	クッション材の使用。
窒息	柔らかいふとんに埋もれる。枕元のおもちゃに埋もれる。ベビーベッドの柵とマットの間に頭が挟まる。	布団の固定の工夫。おもちゃを置かない。柵とマットの隙間をなくす。
熱傷	冷まらずにミルクを与える。冷たい・熱い風呂に入れる。	湯加減をまず確認。赤ちゃんのそばで熱い湯を使わない。
熱中症	車中に放置。炎天下にバギーで移動。	車に赤ちゃんだけ残さない。
交通事故	自動車に同乗していきこる急停車や追突事故。	慎重な運転。ベビーシートの使用。

表1 0～3か月で起こりやすい事故とその対策

②4か月～7か月

この時期の赤ちゃんは、首がすわり、寝返りができるようになります。6～7か月ごろにはおすわりができる赤ちゃんもいます。ガラガラを見せると喜んで手でつかみます。そして、手でつかんだものは何でも口へ運びなめます。

この時期に起きやすい事故とその予防策を表2に示します。

事故例	内 容	対 策
転倒・転落	柵のないベッドで寝返り。おすわりをしながら転倒。	柵をあげる。
誤飲	手にとった煙草をなめる。	なめては困るものを床に置かない。
切傷・打撲	おすわりをして転倒し、家具やおもちゃの角で打撲、切傷。刃物や画鋸などを握って切傷。	触ってはいけないものを床に置かない。転倒してけがをしそうな固い角のあるものを床に置かない。家具の角はクッション材で覆う。
熱傷	ストーブなどによる熱傷。	柵をつける。安全な暖房器具にかえる。
窒息	スタイのひもが絡まっての窒息。	安全なデザイン。正しい装着。夜間には外す。
交通事故	自動車に同乗中の急停車や追突事故。	慎重な運転。ベビーシートの使用。

表2 4～7か月に起こりやすい事故とその対策

③8か月～11か月

この時期になると自分で移動できる範囲が広がります。最初の頃こそ、その場でクルクル回ったり、ズリズリ後ろに下がったりしていますが、10か月にもなると高速ハイハイで猪突猛進、どこへでも行けるようになります。そして、11か月になると、ほとんどの赤ちゃんがつかまり立ちをします。好奇心も旺盛で、目に映ったものすべてに手をだします。

この時期に起こりやすい事故とその予防策を表3に示します。

事故例	内 容	対 策
転倒・転落	階段やハイチェアからの転落。倒れやすい家具などにつかまって立とうとして転倒。滑って転倒。	階段に柵を設ける。バランスよい家具を選択。滑りにくいマットの使用。
誤飲	コインやアクセサリなどの誤飲。葉やたばこの誤飲。	口に入れては困るもの(39mm以下のもの)を手の届くところに置かない(1m以下)。手の届く戸棚、引き出しにはチャイルドロック。※1
切傷・打撲	階段から転落し打撲。転倒し、家具やおもちゃの角で打撲、切傷。	危険な場所へ入れないよう侵入防止柵を。転倒転落時の備えには家具のクッション材を。
熱傷	ストーブなどによる熱傷。ポットや汁の入った器に手を出してやけど。	ストーブには柵をつける。安全な暖房器具にかえる。ポットや熱い湯の入った食器は1m以上の高いところか、侵入できない場所に置く。
溺水	浴槽での溺水。ベビー浮き輪での溺水。	風呂場にチャイルドロック。残り湯をためない。ベビー浮き輪は危険、使うなら目を離さない。
交通事故	自動車に同乗中の急停車や追突事故。	慎重な運転。ベビーシートの使用。

表3 8～11か月に起こりやすい事故とその対策

※1 危険なものを手にしている、口に入れているときには、大声で叫ぶと逆効果。びっくりして誤飲してしまいます。10か月を過ぎると、多くの子供は“ちょうだい”を理解します。穏やかに「ちょうだい。」とって受け取るか、好きなものを見せて物々交換をしてください。泣かせては危険です。

④1歳～2歳

1歳になると、伝い歩きから一人歩きができるようになります。歩けばたちまち走りだし、2歳にもなれば階段も自分で上り下りし、50cmくらいのソファや椅子なら勝手によじ登ります。手先もだんだんと器用になり、スプーンやフォークの使い方も覚えますし、早ければハサミも使います。

大人のすることには興味津々、「だめっ。」といっても引き出しをあけ、隙間があれば指をいれ、ドアのカギを開けたり閉めたり。しかし、まだまだ危険予知能力は未熟で無鉄砲、油断なりません。

この時期に起こりやすい事故とその予防策を表4に示します。

事故例	内 容	対 策
転倒・転落	階段からの転落。ベビーベットの柵を乗り越えての転落。敷居などの段差につまづいての転倒。窓からの転落。	階段には滑り止めを敷く。つまづきやすい段差をなくす。窓にはチャイルドロック。
窒息	豆類を食べた驚いた拍子に気管に吸い込み窒息。ビニール袋や風船による窒息。	口に食物が入っているときは、泣かせない、驚かせない。ビニール袋や風船、菓子のフィルムなどを口に入させない。
誤飲	洗剤やお酒、日用品の誤飲。	手の届く範囲の扉には危険なものは入れておかない。開けられては困る扉にはチャイルドロック。
切傷・打撲	カミソリ、包丁などの刃物による切傷。 スプーンや箸を口にして転倒し口腔内に切傷。	スプーンやフォーク、歯ブラシはやわらかな素材のものを使う。
熱傷	テーブルクロスを引っ張り、頭からみそ汁など熱いものをかぶる。熱い鍋やアイロンに触る。ライターや花火に触る。	テーブルクロスを使わない。クロスを使うときには、上に熱いものはいったん落、落ちて割れるような食器は置かない。触ってはいけないものは手の届くところへおいて置かない。
溺水	浴槽への転落。	浴室のドアのロック。残り湯をためない。
交通事故	自動車に同乗中の事故。駐車場で飛び出しでの事故。	チャイルドシートの着用。駐車場や公道は一人で歩かせない。

表4 1～2歳で起こりやすい事故とその対策

⑤3歳～5歳

この時期は、かけっこも上手になり、高いところからも飛び降ります。3歳児なら30cm位の高さから飛び降りるといわれます。チャレンジ精神も旺盛で、ジャングルジムなどの遊具に挑戦します。三輪車や自転車に乗る子もでできます。

自我が芽生え、なんでも自分でしないと気が済みません。

高いところに置いてあるものを、椅子を動かして登ってとる知恵もあります。よじ登る高さも、3歳児なら65cm、4歳児なら75cmに達します。

ハイハイができるようになる頃には既に、視覚的に奥行き(高さ)を認識できるといわれますが、4歳ごろには、大人と同等に高さの感覚を身につけているといわれています。けれども、高いところから飛び降りたらどうなるのか、まだよくわかりません。

なぜだか、ビーズや豆を鼻の穴や、耳の穴に詰め込みたがる時期でもあります。

この時期に起こりやすい事故とその予防策を表5に示します。

事故例	内 容	対 策
転倒・転落	高いところへ登って転落。ベランダの柵をよじ登っての転落。遊具からの転落。三輪車や自転車での転倒。	ベランダのドアにチャイルドロック。ベランダに足のかけられる鉢などおかない。高いところから転落することの怖さは繰り返し言っておく。発達に合った遊具などを安全に使うことができるように経験をさせることも大事になってくる。
切傷	工作中にハサミで切傷。お手伝いをして包丁で切傷。	安全バサミや子供用包丁の使用。まったく触らせないことはかえって危険。最初は見守りながら、安全な使い方を身につけることも必要。
熱傷	調理器具などによる熱傷。	コンロや、熱い鍋に触ることは危ないと教える。間違っって使わないように、チャイルドロックがついているコンロならロックをする。
溺水	プールや海などでの溺水。	水の中にいるときには傍にいない。大人のいないときに水辺に近寄らないことも繰り返し言うて聞かせる。
その他	耳や鼻にビーズや豆をいれて取れなくなる。	取れなくなったらどうなるか想像できる年齢。鼻や耳に物を入れないように繰り返し言うて聞かせる。
交通事故	目の前のものに気を取られ道路へ飛びし事故。三輪車、自転車に乗っての事故。	習慣的に交通ルールを教える。危険予測ができる年齢になったら、危険な場所や行動についても教えていく。チャイルドシートの使用。

表5 3～5歳で起こりやすい事故とその対策

⑥6歳～15歳

学童以降は、運動能力、判断力ともに成熟してきて、事故の頻度は減ります。大人の同伴なく出かける機会も

多くなり、行動範囲も広がります。
この時期に起こりやすい事故とその予防策を表6に示します。

事故例	内 容	対 策
溺水	川や海などでの溺水。	事故の原因を解析し、自身で危険回避できる年齢。事故の予防方法を自身で考えて実行できるように指導する。
その他	スポーツ中の受傷。	
交通事故	自転車に乗っている事故。	

表6 6～15歳で起こりやすい事故とその対策

さいごに

不慮の事故として扱われるこどもの事故の多くは予測可能といわれます。お子さんの発達段階を見極め、その2か月先くらいを見越した備えを行うことで、重大事故を予防できるといわれます。
子どもの事故とその対応に関するサイトもいくつか挙げておきましたので、ぜひ活用してみてください。2017年も、子どもの重大事故ゼロでありますようお願いいたします。

- 小児科学会
こどもの救急 子どもの事故と対応
<http://kodomo-qc.jp/jiko/index.php>
- 日本小児看護学会
子どもの事故防止ノート
jschn.umin.ac.jp/files/201210_kodomonote.pdf
- 日本小児呼吸器学会
小児の気道異物事故予防ならびに対応
jspp1969.umin.jp/ind_img/cc03.pdf
- 厚生労働省
子どもに安全をプレゼント 事故防止支援サイト
www.niph.go.jp/soshiki/shogai/jikoboshi/
- 国民生活センター
子どもの発達と起こりやすい事故
www.kokusen.go.jp/wko/pdf/wko-201210_01.pdf
- 消費者庁
子どもを事故から守る！プロジェクト
jwww.caa.go.jp/kodomo/

第70回 国立病院総合医学会 報告

日時：平成28年11月11日(金)ー12日(土)
場所：沖縄コンベンションセンター、宜野湾市立体育館
ラグナガーデンホテル、カルチャーリゾートフェストーネ

国立病院機構の全職員を対象とした全国学会が毎年開催されており、今年は沖縄・宜野湾市で開かれました。忙しい日々の診療の中、当院からも多くの発表がありました。それぞれの発表内容は浜田医療センターのホームページに掲載していますのでご覧ください。



発表者一覧	部 署	タイトル
安田 慎一	研修医	外来手術として施行する慢性硬膜下血腫再発時の手術の工夫
河野 明彦	リハビリテーション科	当院における地域包括ケア病棟でのリハビリテーション科の役割
黒崎 亨	リハビリテーション科	当院回復期リハビリテーション病棟における多職種連携への取り組み～担当者ミニカンファレンスを導入した効果～
大峠 祐子	臨床検査科	当センターにおける輸血関連インシデントの事例と分析
小杉 晴香	臨床検査科	頸動脈エコー検査が診断の契機となったBow hunter症候群の一症例
難波 美樹	臨床検査科	体位変換による評価が有用であった心臓欠損症の症例
宮本 由美子	6 階緩和ケア	「遺族への手紙」の取り組みからみえる緩和ケア病棟看護師の思い
吉原 千晶	栄養管理室	外来栄養指導における胃切除術後患者に対する栄養評価
砂口 天兵	研修医	浜田医療センターにおけるシミュレーションスタジオ開設
吉村 由紀	研修医	消化管出血を契機に指摘された胃神経鞘腫の一例
猪木迫 彩香	研修医	マダニによる重症熱性血小板減少症候群 (SFTS) の1例
柿丸 祥子	4 階北病棟	体重増加不良が指摘された新生児を持つ母の心情～退院後から1か月健診までの母へのインタビューを通して～
秋月 光	研修医	気管腕頭動脈瘤からの大量出血を救命できた一例
古志野 海人	研修医	間質性腎炎により急性腎障害を来したCastleman病 (CD) の一例
吹澤 靖子	薬剤部	共通リーフレットを用いた薬薬連携システム構築の取り組み～安全な外来化学療法を目指して～
米田 理恵	5 階南病棟	転倒転落に対する看護師のアセスメント力の向上に向けて～経験値に相違のあるメンバー構成で行うグループワークを通して～

